

「ヒト」名詞の派生について－形態統語論からのアプローチ

山田昌史

An Analysis of Agentive Nouns in Japanese: A Morpho-syntactic Approach

Masashi YAMADA

2019年11月8日受理

抄 録

本稿が取り上げた「ヒト」名詞は、影山(2002)によって3種類に分類されることが提案され、また、それぞれの種類の「ヒト」名詞は、特質構造と語彙概念構造からその生成が説明できることが提案されている。本稿では「ヒト」名詞のうち、「一者」「一家」を主要部に持つ名詞に焦点を当て、その言語事実を整理し、形態統語論(Nanosyntax: Starke(2009), Caha(2009)等)の枠組みからこれらの名詞の生成メカニズムを新たな視点から提案した。具体的には、「ヒト」名詞の主要部となる「一家」「一者」が、①その基体にどのような統語範疇が備わっているのか、②統語操作を経て生成される統語構造がどのような素性の組み合わせを内包するのかの2点から、これらの名詞句の分類的特性と統語的特性の両方が捉えられることを提案した。

キーワード 「ヒト」名詞 形態統語論 Nanosyntax 「一家」名詞 「一者」名詞

はじめに

本稿は、「ヒト」名詞(cf. 影山(2002))の中から、「一家」「一者」を伴って派生される「ヒト」名詞(これを本稿では、それぞれ「一家」名詞、「一者」名詞と呼ぶ。)を取り上げ、Nanosyntax(Starke(2009)、Caha(2009)、Caha(2019)等)の枠組みを用いて、これらの名詞の生成メカニズムの提案を試みるものである。「ヒト」名詞については、宮島(1997)等の分類を礎に、影山(2002)が「ヒト」名詞は3つに分類できることを明らかにし、また、それぞれに分類された「ヒト」名詞がPustejovsky(1995)が提案するクオリア構造と語彙概念構造を用いることで理論的に説明できることを提案している。本稿は影山(2002)の分類とその理論的説明の妥当性を認めつつも、特に「ヒト」名詞の中から「一家」名詞と「一者」名詞に焦点を当て、形態統語論(主にNanosyntax)の枠組みからその生成メカニズムを明らかにする。

本稿の構成は以下である。まず、「ヒト」名詞の分類について宮島(1997)、影山(2002)を概説し、また、「一家」名詞と「一者」名詞について杉村(1986)、影山(2002)から事実をまとめる。1.3節では、影山(2002)で提案された「ヒト」名詞の生成メカニズムの理論的説明をまとめた後、本稿が分析の枠組みとする形態統語論(Nanosyntax)について2節で概説する。その上で、この理論的枠組みから「一家」名詞と「一者」名詞の派生が捉えられることを示す(3節)。最後に、4節で本稿をまとめる。

1. 「ヒト」名詞について

本節では、日本語の「ヒト」名詞についての分類(cf. 宮島(1997)、影山(2002))についてまとめ、本稿で議論する「一家」名詞と「一者」名詞が、上述の先行研究による分類によってどのように分類されるのか、言語事実を整理する。そして、影山(2002)の「ヒト」名詞の派生に関する提案を概観する。

1.1. 「ヒト」名詞の分類

日本語には、基体に付属して「ヒト」を表す形態素が多数ある。例えば、「一人」という接辞は「世話する」や「看護する」といった軽動詞の漢語部分に接続し、その行為を行う人「世話人」「看護人」を派生する。また、「一手」という接辞は「働く」「聞く」などの動詞に接続して「働き手」「聞き手」といった労働力をもつ主体(森田(1995))を表す派生語を生じる。本節では、このような「ヒト」名詞(cf. 影山(2002))と総称される名詞についての分類(cf. 宮島(1997)、影山(2002))についてまとめ、本稿が分析対象とする言語事実を整理する。

宮島(1997)は、日本語の「ヒト」名詞を包括的に研究し、そこに含まれる動作の意味的特性、特に、テンスとアスペクトの観点から4つのタイプがあることを明らかにしている。

- | | | | |
|-----|--------------|-------------|--------------------|
| (1) | a. 現実のシテ | 「…している人」 | 見物人 |
| | b. 潜在的なシテ | 「…する人」 | 看護婦 |
| | c. 経験者 | 「…したことがある人」 | 犯人 |
| | d. 一定の状態にある者 | 「…している人」 | 病人 (宮島(1997): 158) |

このように、宮島(1997)は「ヒト」名詞はテンスとアスペクトの2つの要素の関わり合いから分類できることを示している。

(1)の分類に対して、影山(2002)は宮島(1997)の分類の背後にはアスペクトと「行為の実行が現実か潜在か(影山(2002): 46)」の2つの要素が混在しているという。(1c)は既に行った行為を表すのに対し、(1d)は現在行っている行為を表しているが、このような違いは各動詞が持つ事象のアスペクトタイプに違いが求められることとなり、「ヒト」名詞の特性はその基盤となる動詞のアスペクトタイプに帰するとしている。その一方で、影山(2002)は「ヒト」名詞の行為の潜在性をもとに、動作名詞は3つ

のタイプに分類できることを指摘している。

影山は、宮島の指摘する「一定の状態になる者」(=(1d))は、恒常的な特徴を示すことから、これを「個体解釈名詞」と呼び、残りの3つ(=(1a~c))は実際に動的な事態が引き起こされることが前提となるため「事態解釈名詞」と名付けている。また、いくつかの文法的な振る舞いの違いから、事態解釈名詞には2つのタイプがあることを指摘し、「ヒト」名詞は全体として3つのタイプに再分類できることを提案している。

影山(2002)は、事態解釈名詞が2つに分類できることの根拠として「いる」「ある」との共起性の違いを挙げている。「ヒト」名詞は基本的にはある事態を引き起こす「ヒト」を表すのであるから、その存在を表す際は「いる」と共起するのが一般的である。実際に影山が個体解釈名詞と呼ぶ「ヒト」名詞は「いる」と共起してその存在を表す。

- (2) こに{消防士／登山家／医者／パイロット／看護師／係員／女子学生／労働者／遊び人／落語家}{いる／*ある}。

(影山(2002):48)

一方、事態解釈名詞の中には「いる」とのみ共起可能なものと「いる」「ある」のどちらとも共起可能なものがあるという。

- (3) a. 昼間は{乗客／通行人／登山者／利用者}{いる／ある}
b. まったく{引き受け手／落伍者}{いない／ない(ありません。)}

(影山(2002):48)

「いる」は物体の存在を表す一方で、「ある」は出来事の発生を表すことはよく知られていることから、(3)のような「ヒト」名詞は具体的な人を表しているだけではなく、内包する動詞の事態の意味が強く現れていると分析される。ただし、事態解釈名詞の全てが「ある」と共起するわけではなく、それと共起できない事態解釈名詞も存在する。

- (4) 「(ある時)～がある／ない」で使える事態解釈名詞

該当者、希望者、参加者、欠席者、遅刻者、利用者、受験者、目撃者、逮捕者、遭難者、犠牲者、客、乗客、訪問客、買い手、嫁のもらい手、受け取り人、けが人、負傷者、死亡者、通行人、行方不明者、聴衆

- (5) 「(ある時)～がある／ない」で使えない事態解釈名詞

訳者、筆者、飼い主、難民、住民、いそろう、うそつき、よっぱらい、馴染み客、犯人、犯罪者、発明者、実力者、物知り、金持ち

(影山(2002):49)

さらに、事態解釈名詞と分類される「ヒト」名詞の中には事態の発生時を限定する語句によって修飾されるものがあることが指摘されている。

- (6) a. 昨日の(参加者/欠席者/利用者/犠牲者/逮捕者/乗客/利用客)
b. !昨日の(犯人/酔っ払い/住民/犯罪者/作者/馴染み客/年寄り)
(影山(2002): 49)

影山は(6b)の文法判断を!としているが、これは「ヒト」名詞に内包する事態の発生を時間的に限定する解釈(ここでは、「昨日の行為」)がないことを示している。このような特定時間を表す修飾句を受け入れない事実は、(5)の事象解釈名詞は(4)のそれと異なり、現実世界で基体となる動詞が表す出来事の発生を表すことができないと分析される。そして、影山は(4)のような「ヒト」名詞が内包する出来事の発生を意味するものを「出来事発生名詞」と呼んで事象解釈名詞と区別する。

ここまで、影山(2002)の提案をまとめると、「ヒト」名詞は以下の3つに分類される。

- (7) a. 個体解釈名詞
b. 事象解釈名詞
c. 出来事発生名詞

影山の分類は、宮島(1997)の(1)の4分割を3分割に収斂させ、「ヒト」名詞の内包する意味的な解釈による分析にとどまらず、統語的、形態的振る舞いにも違いがみられることを示した点にこの分類の妥当性が示される。影山(2002)はこれら3つの「ヒト」名詞には基体となる述語の項構造とそれと共に起する付加詞が「ヒト」名詞の形成の際にどのように引き継がれるかに違いがみられるという。

まず、個体解釈名詞であるが、以下のように項も付加詞も引き継ぐことができない。

- (8) a. {A病棟/*この患者}の看護婦、{数学/*二次方程式}の教師、{ビル火災専門/*きのうの火事}の消防士、{歌舞伎/*弁慶}の役者
b. *万年筆での小説家(万年筆で小説を書くという意味で)
*ホースでの消防士(ホースで消すという意味で)
*ピッケルでの登山家

(影山(2002): 50-51)

次に、事態解釈名詞であるが、項の引き継ぎは可能であるが、付加詞のそれは不可能である。

- (9) a. その事件の犯人、ベトナムからの難民、この犬の飼い主
b. *万年筆での作者、*小舟での難民、*ピストルでの犯罪者、*船便での送り主、
*焼酎での酔っ払い、*ピストルでの犯人

(影山(2002): 51)

最後に、出来事発生名詞は項、付加詞ともに引き継ぎ可能である。

- (10) a. 万年筆の愛用者、不景気でタクシーの乗り手がない。嫁にもらい手がない。
b. その事件での逮捕者、自費での参加者、自家用車ででの来場者、電車での通学者、ケーブルカーでの登山者、電車事故による遅刻者、プールでの溺死者、ベトナム戦争での戦死者、大震災での犠牲者／行方不明者、階段での転倒者
(影山(2002): 51)

このように、「ヒト」名詞は基体述語の項や付加詞の引き継ぎについて文法性の違いが見られる。

また、複合語形成の事実を観察すると、上記と同様に「ヒト」名詞がどのタイプに分類されるかによって振る舞いの違いが見られることが観察されている。以下のように、個体解釈名詞は複合語形成が可能である(= (11a))が、事態解釈名詞はそれができない(= (11b))。

- (11) a. ミステリー作家、歴史小説家、歌舞伎役者、トラック運転手、トロンボーン奏者
b. * 神戸住民、* 童話作者、* 殺人事件犯人、* 新興宗教信者
(影山(2002): 51-52)

出来事発生名詞であるが、以下のように複合語の形成が可能であるが、(11a)と異なり複合語を形成するそれぞれの名詞が語アクセントを保持する。このような性質を持つ複合語を影山は「語+」と名付け、(11a)の複合語と区別している。

- (12) 本件 | 該当者、シンポジウム | 参加者、説明会 | 欠席者、保険金 | 受け取り人、財産 | 相続人、募金運動 | 発起人、古典落語 | 愛好者、当店 | 利用客
(影山(2002): 52)

このように、影山(2002)は「ヒト」名詞の内包する出来事性の違いによって意味的に3つに分類することが示され、またその分類は、(A)項構造の引き継ぎ、(B)複合語形成の2つの統語的、形態的振る舞いからその妥当性が示されている。本稿では、影山(2002)の「ヒト」名詞の3分類を採用し、多様な「ヒト」名詞の中から「一家」名詞と「一者」名詞を取り上げ、Nanosyntaxの枠組みからこれらの名詞の生成メカニズムを提案する。

1.2. 「一者」「一家」名詞

本稿は「ヒト」名詞の中から派生に統語的規則性が見られる「一家」名詞と「一者」名詞を取り上げる。これら2つの名詞については、杉村(1986)が意味的観点から事

実を観察している。まず、「一者」名詞であるが、以下の例のように「ただ単にある行為・現象の主体者でありさえすれば、もうそれだけで「一者」と言える（杉村(1986):92)」性質を持つ。

(13) 志願者、受験者、打者、走者

(杉村(1986):92))

杉村によると、野球でプレーを行うものは「打者」「走者」以外は「一手」（投手、野手、捕手、遊撃手などのポジション）で、これら2つの「一者」名詞は「打つ」「走る」行為を行う主体であり、このことが「一手」を伴う「ヒト」名詞と異なる点であるとされる。その一方で、「一者」名詞は「単純に～スル者・～ナル者（杉村1986:92)」である¹と分析されている。

杉村(1986)の観察を影山(2002)の分類に当てはめると、杉村のいう「～ナル者」は個体解釈名詞に分類されるものであるといえる。影山(2002)で取り上げられている個体解釈名詞に分類される名詞は「医者」「労働者」であるが、これらの「一者」名詞は、基体動詞の項も付加詞も継承しないが、複合語の形成は可能である。

- (14) a. *この病人の医者 *この病院での医者 やぶ医者
 b. *清掃の労働者 *工場での労働者 日雇い労働者

一方、杉村のいう「～スル者」を表す「一者」名詞は、影山(2002)の分類では事象解釈名詞と出来事発生名詞の2つのタイプに分割されることが予測され、また、項や付加詞の引き継ぎ、複合語形成の可否からもこの予測が正しいことが分かる。(15)のように事態解釈名詞である「一者」名詞は項は引き継ぐが、付加詞は引き継げず、複合語の形成ができない。一方、(16)のように出来事発生名詞に分類される「一者」名詞は、項と付加詞の両方を引き継ぎ、「語+」と呼ばれる特別なアクセントパターンを持つ複合語を形成する。

- (15) a. (この)小説の筆者 *ペンでの筆者 *小説筆者
 b. (この)電話の発明者 *工場での発明者 *電話発明者
(16) a. デモの参加者 公園での参加者 デモ | 参加者

¹ 杉村(1986)は上記以外にも、非生産的な「一者」を伴う名詞句として以下のものを挙げている。

- (i) a. 一字漢語+者：学者、他者、儒者、王者
 b. 「～ヲ有スル者」：功労者、殊勲者、技術者
 c. 「～ニ在ル者」：部外者、聖職者、高段者
 d. 「～テアル者」：独身者、未婚者、既婚者 (杉村(1986):92-93)

これらのものは非生産的なもの、特に、(ia)のようなものは「歴史的産物（杉村(1986:92)）」であるとされる。または、上述の性質を持つ「一者」を伴う名詞よりも生産性が低いものとされている。本稿では、(i)の4つの特性を持つ「一者」を伴う名詞については考察の範囲外とし、生産性の高い具体的な動作を表す「一者」を伴うもののみを考察の対象とする。

b. 施設の利用者 公園での利用者 公園 | 利用者

これらの事実から、「一者」名詞は、影山 (2002) の 3 種類に分類される「ヒト」名詞の全てを持っているといえる。

一方、「一家」名詞は、以下のような「専門知識・技術を有し、社会的地位・身分のある人 (杉村 (1986) : 93)」であるとされる。

(17) 小説家、漫画家、前衛舞踏家、宗教家、実業家、理論家、噺家

(杉村 (1986) : 93)

また、杉村は「一家」は名詞成分につきやすいことを指摘している。さらに、杉村 (1986) は、「登山者」「登山家」の 2 つの名詞の違いについて、「登山者」には具体的な「登山する」という行為が読み取れ、実際の動作主体を表しているが、「登山家」には具体的に行為を表しておらず、登山という一般的な事項についての知識を有しているという意味しか持たないと述べている。このことから、「一家」名詞は個体解釈名詞であるといえる。

このように、「ヒト」名詞を派生する接辞には多様なものがあり、基体がどのような意味的・統語的特徴を持つとどのような接辞が生じるのかについて全てを把握することは難しいが、「一家」「一者」については一定の意味的制限に従って基体に接続して「ヒト」名詞を派生していることがみてとれる。また、「一家」は、個体解釈名詞のみであるが、「一者」は「ヒト」名詞の 3 つのタイプ、全てがあることが(14)–(16)の統語的、形態的振る舞いから明らかとなった。そこで本稿では、これら 2 つの「ヒト」名詞に焦点を当て、それぞれの派生について後の節で Nanosyntax の枠組みから理論的説明を試みる。

1.3. 「ヒト」名詞の理論的説明：影山 (2002)

本節では、Pustejovsky(1995) の特質構造 (Qualia Structure) と影山 & 柴谷 (1989)、影山 (1996) 等が主張するモジュール形態論の考え方をもとに、前節で述べた「ヒト」名詞の 3 分類に理論的説明を与える影山 (2002) を概観する。

Pustejovsky(1995) は、Calrson(1977) の述語の 2 つのタイプ (Stage-level と Individual level) の違いを名詞に拡張し、physicist, linguist, violinist のような「役割を記述する (role-defined) (Pustejovsky(1995): 229)」と pedestrian, student, passenger, customer などの「状況的に記述する (situationally-defined) (Pustejovsky (1995): 229)」の 2 つのタイプがあるとしている。そして、前者を個体解釈名詞 (individual-level nominals) と事態解釈名詞 (stage-level nominals)² と名付け、区別している。また、これらの 2 つの名詞の違いはそれぞれの名詞がもつ特質構造から導き出されるという。Pustejovsky は pedestrian と violist の 2 つの名詞に以下のような特質構造

² 個体解釈名詞、事態解釈名詞の名称は影山 (2002) によるものである。

を仮定している。

$$(18) \quad \left[\begin{array}{l} \text{pedestrian} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = x \\ \text{AGENTIVE} = \text{walk_act} (e, x) \\ \dots\dots \end{array} \right] \end{array} \right]$$

$$\left[\begin{array}{l} \text{violinist} \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = x \\ \text{TELIC} = \text{play} (e, x, y: \text{violin}) \\ \dots\dots \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Pustejovsky (1995): 230)

事態解釈名詞である pedestrian は特質構造の AGENTIVE にその具体的動作 (walk_act) が記述されることで、その動作の発生を主体的に行う人である pedestrian を特徴づけている。一方、violinist は、語の目的と機能が記述される TELIC に「バイオリンを弾く」が記述されている。Pustejovsky (1995) は Moravcsik (1990) の「ある物体の使用に結びつく最も典型的な動作は総称的な陳述である」との観察から、この「バイオリンを使って演奏する」という記述が violinist の総称的な特徴として記述されることになり、violinist が個体解釈名詞として分類されるとしている。このように、事態解釈名詞と個体解釈名詞の違いは特質構造内のどの役割に語を特徴づける具体的動作が記述されるかの違いによって説明される。

この Pustejovsky の分析を影山 (2002) は日本語の「ヒト」名詞に適用している。前述のように、影山の「ヒト」名詞の3分類のうち、(7a-b) は上記の Pustejovsky が指摘する名詞の特徴と符合する。このことから、これらの「ヒト」名詞は、(18)の特質構造の違いによって捉えられると主張する。残りの影山が出来事発生名詞と名付けた (7c) は、前述の(12)の複合語の事実から、完全な語としての性質を超えて語彙的な性質と統語的な性質を合わせ持つ「語+」という特徴を持つ。そこで影山は、出来事発生名詞は特質構造にその特徴が記述されるのではなく、語彙概念構造から生成されることを提案している。

$$(19) \quad \text{動詞部分の概念構造 } ([]_x \text{ ACT} \dots) \text{ に接辞の意味 (human (x)) を加える} \\ \rightarrow \lambda x [([]_x \text{ ACT} \dots) \wedge \text{human (x)}]$$

(影山 (2002) : 54)

このように、出来事発生名詞が語彙概念構造から派生されるとすることで、出来事

発生名詞が項と付加詞を引き継ぐことができ、また、「語+」と呼ばれる複合語を生成できることが説明できるという。事態解釈名詞と個体解釈名詞は特質構造、出来事発生名詞は語彙概念構造と2つの語を派生する言語部門から3つのタイプの「ヒト」名詞が派生することとなるが、影山の一連の研究（影山（1993）、影山（1996）、影山&柴谷（1989）等）に従って、語形成は複数の言語部門でなされるとするモジュール形態論を採用することで、「ヒト」名詞のうち、語彙的性質の強い個体解釈名詞と事態解釈名詞は特質構造、統語的性質を持ちうる出来事発生名詞は語彙概念構造と、派生される言語レベルが異なることを認めている。

ここまでまとめると、影山（2002）は、「ヒト」名詞は3つのタイプに分類され、また、それぞれの「ヒト」名詞は、特質構造または語彙概念構造からその生成が理論的に説明できることが提案された。本稿で考察の対象とする「一家」「一者」名詞については、前節で、影山（2002）の「ヒト」名詞の3分類によって分類できることを示したことから、上述の影山（2002）の理論的枠組みからその振る舞いが説明されることが自然に導かれる。しかし、影山（2002）の理論的説明は、① 複数の言語部門にまたがる理論体系をなしていること、② 個々の形態素に対する具体的な言及がないことなどに問題がある。そこで、本稿では、「一家」と「一者」の2つの形態素に焦点を当て、次節で概説する形態統語論の立場から、1つの統合的な理論体系から「一家」名詞、「一者」名詞の派生を説明する。

2. 形態統語論（Nanosyntax）について

本節では、本稿が理論的枠組みとして採用する形態統語論（主に Nanosyntax）について、その理論的枠組みを概観する。

形態統語論の枠組みは、形態部門と統語部門の分割せず、語の形成は統語的な規則に従い、語と文の生成過程を一元化するものである。その代表的な枠組みとして、分散形態論（Distributed Morphology（Halle & Marantz（1993）、Marantz（1997）等）が提案され、様々な言語事実の理論的説明が試みられてきた。また、近年、Chomsky（2001）以降の Minimalist Program の新たな進展に呼応して、分散形態論を基盤としながらも、それをさらに発展させた Nanosyntax（cf. Starke（2009）、Caha（2009）等）と呼ばれる形態統語論の枠組みが提案されている。

Nanosyntax は、分散形態論を発展させた形態統語論であるため、①形態要素の合成は、統語論の一部として捉える（‘syntax all the way down’（Caha（2019）: 1）、②併合（Merge）と移動（Move）の2つの操作によって形態合成を行う、③形態要素の後挿入（Late Insertion）を認める、などの点で分散形態論と軌を一にする。これら3つの特徴を備えていることから、両者は形態部門と統語部門を分離せず、両者をひとつのシステムの中で一貫した操作を仮定して語と文の構築を行うことができる理論的枠組みであるといえる。

その一方で、分散形態論と Nanosyntax では、形態合成の基本的単位を何にとするのかに違いが見られる。素性の束（feature bundles）を基本単位とする分散形態

論とは異なり、Nanosyntax では、単一の素性 (single features) をそれとする。これを Caha (2019) は、以下のように定義している。

(20) No Bundling

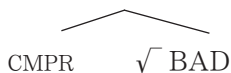
The atoms (terminal nodes) of syntactic trees are single features. All combinations of morphosyntactic features arise as the result of (binary) Merge. Pre-syntactic feature bundles do not exist, they correspond to phrases assembled by syntax.

(Caha (2019): 3)

Nanosyntax で素性の束を認めない理由として、Caha (2019) は、素性の束は言語の個別性に由来するものであり、これを仮定する限り形成される統語構造も個別言語の特性を反映したものにならざるを得ないとしている。Caha は、Cinque & Rizzi (2010) の「機能的な範疇の存在がある言語で認められれば、全ての言語で同様の機能範疇が存在している」という考えを引用し、形態的な合成に必要な個別言語に特徴的な要素は存在しないとしている。その代わりとして Nanosyntax では、統語構造のカートグラフィー (Cinque & Rizzi (2010) 等) を採用し、形態合成にカートグラフィーを導入している。このことから、Nanosyntax では個別言語がそれぞれがもつ統語構造以前の語彙部門を仮定しなくても済むこととなり、より普遍性の高い言語理論であることとなる。

また、Caha (2019) は、比較級の派生に関わる分散形態論の説明に理論的な問題があるとしている。分散形態論では、bad の比較級 worse は以下のように $\sqrt{\text{BAD}}$ という non-terminal の要素に CMPR が Merge することで CMPRP という terminal node が生じると分析している。そして、分散形態論で仮定されている(22)の Subset Principle によって(21)のように bad の比較級の worse が語として生じるといふ。

(21) CMPRP (worse)



(Caha (2019): 6)

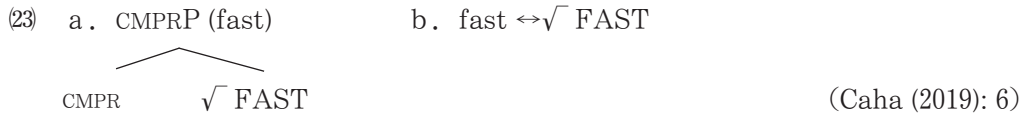
(22) Subset Principle³

The phonological exponent of a Vocabulary Item is inserted into a morpheme of the terminal string if the item matches all or only a subset of the grammatical features specified in the terminal morpheme.

(Caha (2019): 5)

³ Caha (2019) では、(21)の Subset Principle 自体にも問題があり、The Generalized Subset Principle (Caha (2019): 6) という仮の原理を用いて worse の派生について説明しているが、本稿では、上述の(21)の Subset Principle を受け入れる。

Subset principleに従って、構造化された non-terminal の要素に語彙挿入されて worse が派生される。しかし、Caha (2019) は、この subset principle によって(23)のような fast の比較級を過剰生成するおそれがあることを指摘している。

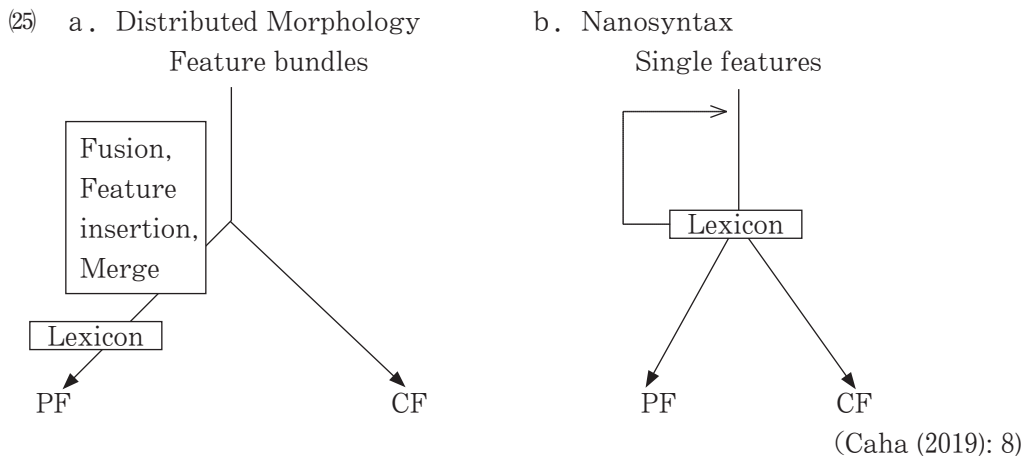


worse と同様の派生をたどる - と、(23a) のように fast は CMPRP の subset となっている 2 つの素性を持っているので派生が収束するが、語彙化された fast は比較の意味を持っていない（比較級として語彙化されるべきなのは faster）ため、形式と意味にミスマッチが生じてしまう。このことから、分散形態論が語彙化のメカニズムとして仮定する(22)には理論的に問題があるという。

また、分散形態論では、上述の問題の回避のために、Fusion という post-syntactic な操作を仮定した分析が提案されている。



Fusion の操作は、語彙挿入が起こる前の操作で (25a) のように PF 側でのものである。このため、Fusion を経て PF 側に送られるものは語の解釈に関わらないこととなり、語彙挿入されたものがどのように解釈されるのか分からない、つまり、挿入された語と解釈が一致しないことが生じるおそれがある。



そこで Nanosyntax では (25b) のように、語の形成に関わる全ての操作が終わった後に語を挿入するモデルを提案している。このことで、上述のような分散形態論が抱える問題点を回避する。そして、比較級 worse の派生は、(26)の Overspecification とそれを駆動する Starke (2009) が提案する Superset principle から説明されるとされる。

(26) Overspecification (a feature specific to Nanosyntax).

In order for a lexical item to be inserted in a node, the lexical entry must fully contain the syntactic node, including all its daughters, granddaughters, etc., all the way down to every single feature dominated by the node to be spelled out, and in the right geometrical shape.

(Caha (2019):10)

(27) The Superset Principle, Starke (2009):

A lexically stored tree L matches a syntactic node S iff L contains the syntactic tree dominated by S as a subtree.

(Caha (2019):10)

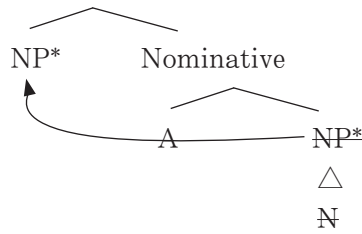
(27)では、語彙的な構成要素を備えた構造（例えば(21)）が統語的な node で支配された統語構造を含んでいなければならないため、non-terminal なものが spell-out する必要がある。そのため、Fusion のような操作を仮定しなくても(21)は worse を派生する。一方、(23b) のような（比較級としての）fast は、fast の語彙エントリーには比較級としての用法がないため、(23b) は spell-out されないとされる。このように、Nanosyntax は、分散形態論よりも少ない道具立てで、また、より統語論で提案された生成手段を用いて語の生成を適切に説明できる理論であるといえる。

また、Nanosyntax では、語の生成に関わる構造に Cinque & Rizzi (2010) 等が提案するカートグラフィーを取り入れ、語形変化について理論的に説明する。Caha (2009) は、以下のような（現代）ギリシャ語の名詞の格変化（=(28)）は、(29)のような構造から派生すると分析する。

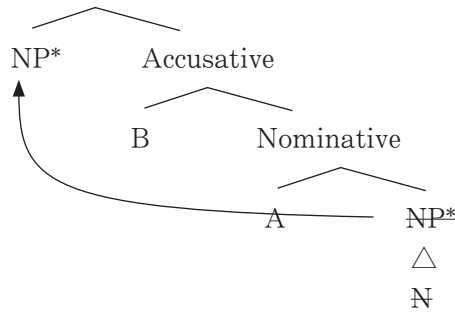
(28) Modern Greek, Class I and V (from Alexiadou and Müller 2005)

	anthropos (man, sg.)	vun (mountain, sg.)	
NOM	anthrop-os	vun-o	
ACC	anthrop-o	vun-o	
GEN	anthrop-u	vun-u	(Caha (2009): 52)

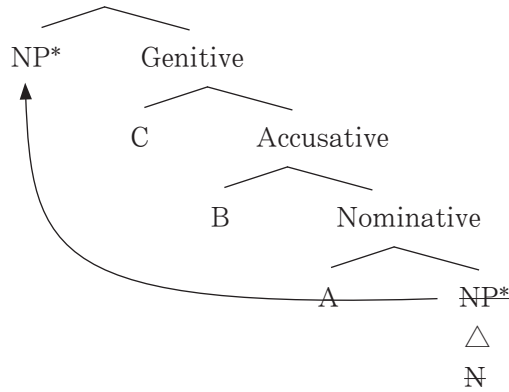
(29) a. Nominative:



b. Accusative:

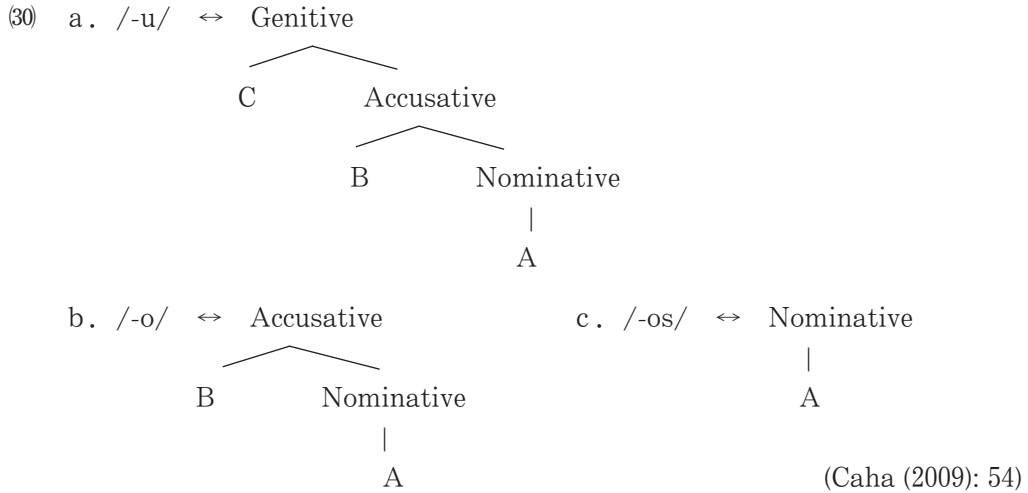


c. Genitive:



(Caha (2009): 53)

格変化を受ける NP はその格変化を促す素性を c-command する位置に Move する。この構造から格がどのように形態的に生じるのかが問題となるが、例えば、(29c) は、(30a) のように統語構造の A、B、C の 3 つの素性が合わさり、-u として接辞化することで格を表す形態素を生じる。



(30)の各構造をインプットとして、それぞれの接辞がアウトプットとして形成され、(27)の規則に従って、それぞれの形態素が具現化することになる。(30)の格変化の構造をみると、格の具現化は上述のようなカートグラフィーから構成されている。また、このカートグラフィーに生じる要素は普遍性を備えているものであるで、理論的に妥当な機能的要素が統語構造に反映されているといえる。これらのことから、Nanosyntaxが分散形態論よりも統語的なルールに基づいて語形成を説明しようとするのがみてとれる。

本節では、Nanosyntaxの基本的な考え方を、統語的な規則から語形成を捉え、それに必要な語彙部門を認めない点で軌を一にする分散形態論との比較から概観した。次節では、Nanosyntaxの基本的な枠組みに従って、「一家」名詞と「一者」名詞の派生について理論的説明を試みる。

3. 「一家」「一者」名詞の分析－Nanosyntaxの枠組みを用いて

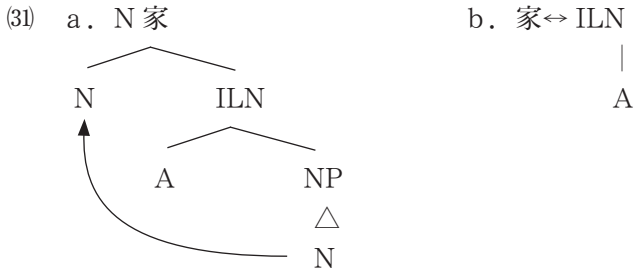
本節では、前節で紹介した形態統語論(Nanosyntax)の理論的枠組みを用いて、「一家」「一者」の派生メカニズムを提案する。

まず、「一家」名詞についての分析を提示する。杉村(1986)が指摘(1.2節参照)するように、「一家」名詞は具体的な動作を内包しない名詞である。そこで、本稿では、以下のようにNPを基体とすると仮定する。また、この名詞は、影山(2002)の分類では個体解釈名詞に当たる。個体解釈名詞を生成する素性(A⁴)がNPとMergeすることでILN⁵を形成する。NがMoveによってILNと内的Mergeを行うことで(31a)

⁴ 本節で使用しているA、B、Cのそれぞれの素性は、説明の便宜上仮称したもので、その内的な特徴については、影山(2002)の「ヒト」名詞の3分類に従って、それぞれに分類される名詞を派生するための素性とする。

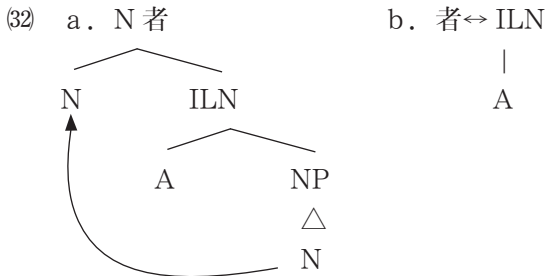
⁵ 本節のILN等はPustejovsky(1995)の名詞の分類名を利用してindividual-level noun(影山の「個体解釈名詞」)をILN、stage-level noun(影山の「事態解釈名詞」と「出来事発生名詞」)をSLNと記している。SLNは影山(2002)では2分割されるため、事態解釈名詞をSLN、出来事発生名詞をSLN2と記している。

の構造が派生する。



そして、(31b)のように、Aの素性をもつILNが「家」と接辞化することで「一家」名詞が派生する。

次に、「一者」名詞についてその構造を提案する。1.2節で述べたように「一者」名詞は3つの種類に分類される。そのため、以下のように3つの異なる構造からそれぞれの解釈をもつ「一者」名詞が派生する。まず、個体解釈名詞としての「一者」名詞であるが、(32a)の構造から派生される。



「一家」名詞と同様に、個体解釈名詞に分類される「一者」名詞は個体解釈名詞を生み出す素性AがNPを補部として選択する。そして、NがILNをc-commandする位置へと移動する。そして、(32b)のように、ILN-Aが個体解釈名詞を派生する接辞「一者」として具現化する。

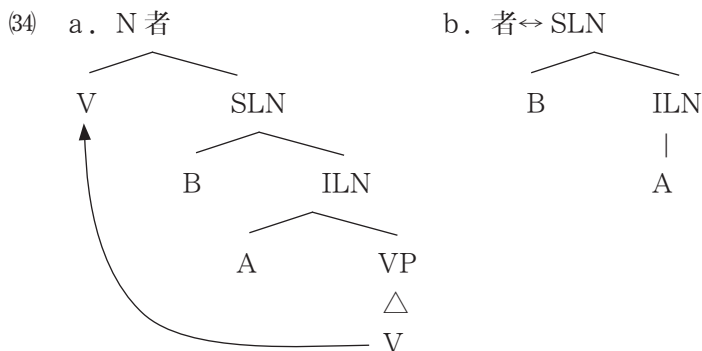
(32)の構造は、(14)で指摘した個体解釈名詞が項や付加詞を引き継がず、複合語形成が容易であるという事実((14)を(33)として再掲)を正しく予測する。

- (33) a. *この病人の医者 *この病院での医者 やぶ医者
 b. *清掃の労働者 *工場での労働者 日雇い労働者 (14)を再掲)

(32a)の構造では、個体解釈名詞の基体となりILNをc-commandする位置に上昇する構成素はVではなく、Nである。そのため、(33)のような項や付加詞を継承するこ

とができない。また、具現化する名詞は N からできていて、この N がその外側に N を取って複合語を形成できることは容易に予測できる。このように、(33)の特徴を示す言語事実は、(32)の構造から正しく導き出される。

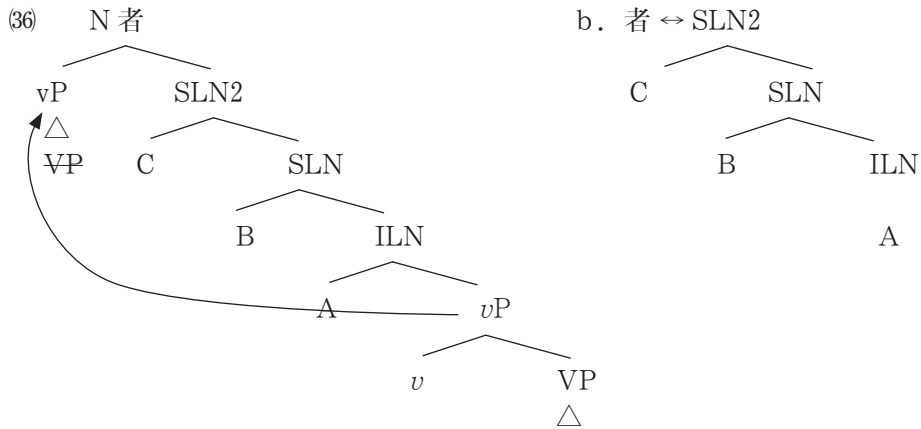
次に、事態解釈名詞に分類される「-者」名詞の構造を (34a) のように提案する。この「-者」名詞は VP をその基体に持ち、それが素性 A と Merge し ILN を形成する。ILN が事態解釈名詞を生み出す素性 B と結合して SLN を形成する。SLN に V が Move することで (34a) の構造が派生される。また、(34b) の構造から事態解釈名詞の解釈をもつ「-者」が具現化される。



(34a) の構造は、(15)で指摘した事実 (35)として再掲) を正しく予測できる。まず、事態解釈名詞が項のみを継承し、付加詞は継承しない事実であるが、(34)で Move して SLN を c-command する位置に上昇するのは V であるため、この V が選択する項は継承できる。しかし、V には付加詞が取り付く統語的位置が存在していないため、付加詞は継承されない。また、同様に V に「-者」が結合しているため、これが名詞と結合すると、基体となる「-者」名詞が内在する文法範疇とその外側に結合しようとする語の文法範疇がミスマッチをおこすため、複合語の形成を許さないことが説明できる。

- (35) a. (この) 小説の筆者 * ペンでの筆者 * 小説筆者
 b. (この) 電話の発明者 * 工場での発明者 * 電話発明者 ((15)を再掲)

最後に、出来事発生名詞に分類される「-者」名詞についてその構造と派生を説明する。この名詞に分類されるものは、(36)のように基体に vP をとり、A、B、C の 3 つの素性をその内部構造にもつ。一番外側の C が出来事発生名詞を派生する素性をもつもので、SLN と Merge して SLN2 を派生する。



上記2つの「-者」名詞と同様に、(36b)の構造の中のA、B、Cの3つの素性の組み合わせから出来事解釈名詞としての資格を持つ「-者」名詞が具現化される。(36a)の構造から(16)の事実 (= (37)として再掲) が説明される。

- (37) a. デモの参加者 公園での参加者 デモ | 参加者
 b. 施設の利用者 公園での利用者 公園 | 利用者 ((16)を再掲)

(36)の構造でSLN2と内的 MergeするのはvPである。vPはVを内包することから、それが選択する項を継承することは(34)の事態解釈名詞と同様である。項に加えて、付加詞を継承することが可能な事実は、出来事性を備えるvPは付加詞を受け入れることができるため、vP内に生じることができる付加詞が継承されることが説明される。また、影山(2002)が「語+」と名付ける複合語の形成を許す事実についても、結合される名詞句がvPという機能的な範疇を内包するため、語としての独立性が高いと仮定すると、前要素に名詞を取って複合語を形成しても強アクセントを保持して、特殊な複合語を形成することができる」と分析する。

このように、「-者」名詞は3つに分類されるものの、どれも同じ形態「者」として具現化している。しかし、(32b)、(34b)、(36b)のように、それぞれ統語構造が内包する素性の種類が異なっていることから、それぞれの「-者」がどの解釈を持ちうるかは、それらの持つ統語構造に内包される素性の組み合わせから予測される。また、Moveする統語範疇の違いにより、(14)–(16)で指摘した事実についても、本節で提案したNanosyntaxを理論的背景に持つ統語構造から正しく説明される。

本節では、「-家」名詞と「-者」名詞について、Nanosyntaxの枠組みを用いて、理論的枠組みを提案した。本節の提案により、影山(2002)とは異なり、1つの言語部門から3つの種類の「ヒト」名詞の生成が理論的に説明できることが示された。

次節で、本稿をまとめ、本稿の今後の課題を述べる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、「ヒト」名詞の中から「一家」「一者」を主要部とするものについて議論してきた。「ヒト」名詞は影山(2002)によって3つのタイプがあることが明らかにされ、また、その生成がモジュール形態論に従って特質構造と概念構造のそれぞれに着目することで捉えられることが示された。本稿はこの理論的分析の妥当性を認めながら、形態統語論のひとつである Nanosyntax の枠組みを用いて、「一家」「一者」を主要部とする「ヒト」名詞について理論的説明を試みた。本稿の提案は、「ヒト」名詞の主要素となる部分である「一家」「一者」が、その基体にどのような統語範疇が備わっているのかということと、統語操作を経て生成される統語構造がどのような素性の組み合わせを内包するのかの2点から、これらの名詞句の分類的特性と統語的特性の両方が捉えられることを提案した。このことで影山(2002)の3つの部門に分けた理論的枠組みを1つの形態統語部門で説明されることとなった。

本稿で取り上げなかった主要素を持つ「ヒト」名詞に本稿の提案を検証することで理論の妥当性を検討することが、今後の課題となる。

参考文献

- Caha, Pavel. (2009) *The Nanosyntax of Case*. Doctoral Dissertation, University of Tromsø, Tromsø.
- Caha, Pavel. (2019) 'Nanosyntax: some key features.' Manuscript, Masaryk University, Czech. (lingbuzz/004437)
- Carlson, Gregory. (1977) *Reference to Kinds in English*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Chomsky, Noam. (2001) 'Derivation by phase.' In (ed.) Kenstowicz Michael, *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo and Luigi Rizzi. (2010) The cartography of syntactic structure. In (eds.) Heine, Bernd and Heiko Narrog, *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*. 51-65. Oxford, Mass.: Oxford University Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz. (1993) 'Distributed Morphology and the pieces of inflection.' In (eds.) Hale, Kenneth and Samuel J. Keyser, *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, 111-176. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎(2002)「動作主名詞句における語彙と統語の境界」『国語学』53-1, 44-55.
- 影山太郎、柴谷方良(1989)「モジュール文法の語形成論—「の」名詞句からの複合語形成」久野暲、柴谷方良(編)『日本語学の新展開』139-166. くろしお出版
- Marantz, Alec (1997) 'No escape from syntax: Don't try morphological analysis in the privacy of your own lexicon.' *University of Pennsylvania Work-*

- ing Papers in Linguistics* 4, 201-225. University of Pennsylvania.
- Moravcsik, M. Julius. (1990) *Thought and Language*. London, UK : Routledge.
- 宮島達夫 (1997) 「ヒト名詞とアスペクト・テンス」川端善昭、仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』 157-171. ひつじ書房
- 森田良行 (1995) 『基礎日本語辞典』 角川学芸出版
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Starke, Michal. (2009) Nanosyntax: A short primer to a new approach to language. *Nordlyd* 36.1, pp. 1-6. CASTL, Tromsø. (lingbuzz/001230)
- 杉村博文 (1986) 「一者 一家」 『日本語学』 5, 92-96. 明治書院

